

雨 飾 山 麓 の 植 物 採 集

渡 辺 隆 一

第96回例会は、昭和58年7月30～31日、北安曇小谷村の雨飾山麓で行なわれた。参加者は荒井律子、大塚孝一、北沢靖司、草間勉、斉藤定美、春原弘、千村速男、中村英夫、堀米富平、望月精一と案内役の池上睦美、幹事の渡辺の12名であった。

夕方5時に小谷村営雨飾山荘に集合。交通不便な所のためか、全員自家用車を利用した。夕食事に、明日の晴天を願って乾杯の後自己紹介。今回は急に幹事が変更になったため地元の池上氏に植物案内をお願いした。氏からこの地域の植物の話やコースについてうかがった。天狗原登山道は大雨でくずれて整備不良とのこと、雨飾方面にコースを変更する。

翌朝、健脚の千村氏は当初の予定通り天狗原山に向かった。後、無事下山された由。本隊は雨飾山の登山口まで分乗してゆく。林道の両わきの二次林の植物を皆で確かめながら進む。大塚氏から一同苦手なシダ類をこの機会にと熱心に教わる。この日の見どころの？湿原に降りる。平坦な河岸に発達したヨシやオオハナウドなどの大型多年草を主体とした広大な湿原である。湿地の中の道を長靴で進む。その一画にこの湿原の特記種、オニシオガマがあった。通常は高山帯に生育する本種が、標高1150m足らずのこの湿原に隔離的にみられることは、植物地理上昔から注目されていた。ナンブアザミやシラネアオイなど湿生の植物がたくさんみられ、ここは植物の宝庫といえよう。湿原の終る河原で一休み。ここから雨飾山まではなかなかの急坂で、時間的にみて全員が登るのは無理ということになった。今回の採集会のまとめをして、いちおう解散とする。戻る組は

鎌池をめぐり山荘に降りた。

大塚、春原、堀米、渡辺の4人が山頂めざして出発。シシガシラとミヤマシシガシラというよく似たシダが混生してはえており、両者の違いを見比べることができた。途中の荒菅沢では盛夏というのに大量の雪が残り、雪溪の下を流れる雪解け水の音が響いていた。やはり、北信地域の極端な多雪によるのだろうが、標高1500m程度でこんなにも雪が残っているのは驚きである。この冷たい水でのどをうるおして早目の昼食にする。急斜面を登り尾根にとりつくと、登山予定であった天狗原山などの峰々が眼前に見える。エゾシオガマやタテヤマウツボグサ、ミヤマトウバナ、グンナイフウロなど高山生の植物が、丈の低いチシマザサの間にかたまって生えている。尾根に登りきると眼下には糸魚川市と日本海とがすすんで見えた。マルバダケブキ、タムラソウ、コメツツジ、ミヤママコナ、タカネシュロソウなど、志賀高原でもなじみの植物が多いが、ベニバナイチゴやオオバクスマレ、アラシグサなど久しぶりに見る植物にも出合った。山頂付近の岩場ではニョホウチドリの花も見られた。ミヤマムラサキ、チシマゼキショウ、ミヤマウイキョウなどの高山植物が、標高2000mにも満たないこの山にたくさん見られるのには感激の連続であった。苦しい登りもすっかり忘れての楽しいひとときであった。なんとか全員で登りたかったというのが正直な感想である。下りは一気に降り、4時半に山荘に戻った。会員の皆様がぜひ一度は登られるとよい山だと思いました。

信州大学農学部西駒演習林の植物採集

馬 場 多久男

第97回例会は、日本植物学会中部支部例会と合同で、昭和58年9月10日(土)～11日(日)に、伊那市内の萱桂小場、信州大学農学部西駒演習林で行われた。参加者は当日参加を含めて、鈴木久雄、吉玉国二郎、酒谷昌孝、広木詔三、小口好久、清水建美、清水健、和田清、岩波均、古谷義人、中堀謙二、斉藤定美、

河田俊郎、中村英夫、卯之原慶助、神田淳、天野敏男、上西実、渡辺透、池田信三、横内正の諸氏と幹事の馬場を含め総勢22名の盛会であった。

第一日目(9月10日)は、伊那市西箕輪羽広荘に午後6時集合した。食事前には参加者の自己紹介を行ない、ビール等を軽くいただきながら夫々の近況

を語り、食事後は中央アルプスに分布する植物のスタイルを見ながら意見交換をおこなった。

翌日（9月11日）は羽広荘を午前8時に出発し、西駒演習林の入口である桂小場前、午前8時30分に当日参加者と合流した。天候は小雨が降っていたが決行し、桂小場からしばらく登ると左岸に西駒ヶ岳登山道があるが、小黒川沿に上流に向って登ると、標高1250mの右岸沢筋にカシワバハグマの小群落があった。個体数が少ないため採集せず確認するととどめた。附近で花の咲いていた植物を上げると、ハンゴンソウ、ミゾソバ、アキノウナギツカミ、キツリフネ、ヤマゼリ、ヨツバヒヨドリ、ウシノシッペイ、キンミズヒキ、ヤクシソウ、コウゾリナ、クルマバナ、タニソバ、ヤブマメ、ツリフネソウ、オトコエシ、ナギナタコウジュ、ノコンギク、タマアジサイ、ヤマハハコ等であった。

標高1300m地点には上伊那農業高等学校の演習林宿泊施設があり、周囲は実習に利用されているサワラ、ヒノキ、カラマツの林がある。斜面沢筋はウダイカンバ、ミズナラ、ミズメ等の落葉広葉樹林となっている。沿道にはゴマナ、タニタデ、シデシャジン、セキヤノアキチョウジ、フシグロセンノウ、イナカギク、ノリクラアザミ、コシオガマ、アキノギリソウ、イワハタザオ等が見られた。

小黒川の右岸から吊橋を渡り、左岸を登るとダムの上にでる。いまひとつ左岸から右岸に渡る吊橋が掛けてあったが、ダムは土砂で埋り吊橋も半分以上埋った状態であった。夏季には信大自然研グループ（学生）が、土砂の間にハクセンナズナと思われる植物をみつけたことを知り、今回の例会を機会にその確認をするために立ち寄って見た。1株ではあったがやゝ大きな石間に生えており、ハクセンナズナの特徴である扁平で線形の果実をつけていたので、同定するには十分であった。茎の先端部分はほとんど枯れていたが、茎の基部からは次年度生長すると思われる根葉が、ロゼット状になっていた。

生育している場所、環境等の状況から推察して、この場所に以前から定着していたものではなく、上

流から土砂と共に流出してきたものと思われた。しかし、このまゝの状態では、いずれ土砂に埋るか流されてしまうおそれがあり、この場所に定着できないものと判断し、土砂の安定した場所に移植することを試みることにした。

株を掘るにあたっては、根系をいためないように慎重にした。清水先生が根系、越冬形態等を詳しく調べた後に、参加者の方々と共生している環境に近い場所を選定し、以後の繁殖を期待しながら移植を終了した。

当地域のハクセンナズナは採集し尽されて絶滅したとも伝えられていたが、小黒川上流域でみつけたことを信州大学農学部演習林報告第1号（昭和32年）に、報告されていることなども考慮して、現在もほぼ間違いなく上流地域に分布しているものと思われる。

標高1350mの沢筋はカラマツの人工林の中に、天然生のサワラが点在し、小群状にサワグルミが生育し、疎開した部分にはヤマブドウ、ミヤマタタビ等のつる性の植物が繁茂している。沿道から林内にはオオヤマレンゲ、ツバメオモト、フウリンウメモドキ、クロクモソウ、ズダヤクシュ、サラシナショウマ、オクヤマコウモリ、カメバヒキオコシ等が見られた。

さらに沢筋を登り、標高1450m地点から水無坂（演習林内の望学台に通じる道）を登ると尾根筋にはサラサドウダン、アキシバ、オオバスノキ、コヨウラクツツジ、ベニバナノツクバネウツギ、ナナカマド、ミズメ、ツバメオモト、イワカガミ、ミヤマシグレ、ゴゼンタチバナ等が多く見られた。

標高1550m地点まで登ると左側にブナとミズナラの大木があり、ここで休憩をとりながら天候の様子を見たが、雨は朝から降り続けているために、目的地の望学台まで登ることを断念し下山することとなった。

桂小場の演習林宿舎に戻って昼食。食事中の話題に、昭和59年度の例会は養命酒の薬草園が候補地に上がったところで、本会は現地解散となった。

〔秋季例会合宿調査報告〕

小路峠・柿其溪谷の植物採集

下野園 正

第98例会は木曾谷でということで、幹事をおおせつけられたが、不首尾が重なり、昭和58年11月11・

12日という、紅葉も終る季節外れのものとなった。場所は木曾郡大桑村、南木曾町界の小路峠を中心に